

約一ヶ月分の準備を整へ、兵庫縣當局の了解を得、團長荒井徳治氏、副團長合田久一氏指揮の下に威風堂々九月七日午後一時神戸出帆の長崎丸にて横濱に向け出發せり。義勇團の活動に伴ひ緊要缺く可らざるは小蒸汽船の出動なり、之が應急策として兵庫高見商店の石油發動機船高見丸を買ひ入れ、通船二隻と共に九月八日神戸出帆の軍艦陸奥の好意に依り横濱に廻送せり。

義勇團及高見丸は横濱着後臨時震災救護事務局、軍艦伊勢及海軍輸送司令部の指揮を承け、當時在泊の愛子丸、第二保存丸、嚴島丸、初音丸、蓬萊丸の諸小蒸汽船及登山丸、神奈川第三二六號の二舢舨を徵發し、直に救援船大榮丸、華山丸其他に就き救護品の揚陸作業に従事し連日晴雨の別なく朝は未明より夜は深更に至るまで能く缺乏、困苦と闘ひ連續的奮闘の結果横濱に於ける救護品揚陸の端緒を開くを得たり。爾來本作業は海軍の手に依て直營せらるゝこととなりたるを以て義勇團は當該官憲の了解を得て九月十七日横濱出帆の長崎丸にて歸神せり。而して高見丸及通船は今尙引續き横濱に於て活動し居れり。

本團婦人部は神戸に於ける收容所閉鎖後、今尙横濱に殘留せる多數海員家族に就て親しく其困難なる境遇を慰め、且救護品を贈呈し、又一つには具さに其慘狀を目撃し、之を以て精神的にも將た又物質的にも日常の處世上有益なる家庭的敎訓の資料に供せんとする極めて意義ある考慮の下に特に婦人慰問隊を組織し、木村ふじ子、安樂あや子、小幡わか子、木村いし子、小幡廣介諸氏の一行十月十六日神戸出帆の太平洋丸にて横濱に向ひ、支部の協力と相待て戸數に於て三百十戸人員に於て約一千人に對し殆ど戸別的に訪問し、食料、衣類、寢具其他日用必需品を贈呈し、同月二十六日と二十八日の兩日に歸神せり。而して之等の家族は別に避難に要する資力もなく又外に頼るべき友もなき境遇の人々にして、何れも不完全なる素人作りの假小屋に住み雨は漏り風は通す伏家の中に今尙浴衣がけに頬被り寝ぬるに夜具なく敷くに疊なく見るも氣の毒なる境涯なり。其上平素男手に乏しき海員家庭のこころなるが故に配給品も意の如く手に入らず辛ふじて其日々々の露命を繋ぐのみ、其慘狀實に言語に絶し本團の慰問品が之等の人々の手に渡さる